

くなつて、直ぐにも描て見たくなつた、取敢へずドレか一枚手本として買て歸らうとまでは思つたが、一小額面に其頃大枚五六圓といふ金を支拂ふことの其れが僕の懐の勘定よりは、寧ろ何だか世間態がおかしいやうな氣がして、残り惜かつたが終に買はずに宿へ歸つた、其の翌日は先第一に材料の仕入といふので、本郷から神田、それから京橋まで西洋の筆墨紙を賣るやうな店と見れば、残らず「西洋水彩畫といふ繪をかく紙と繪の具はありませんかナー」といふ調子で歩いて歩いたが何處にも無かつた、其の翌日も方面をかへて尋ね廻つたが一軒も當り付かなんだ、今度は手段をかへて知己訪問と出掛て、四人ばかりに尋ねたが皆門違のこととして一向知れない、仕方がないので其の方は一先づ置きにして、其れよりは何か水彩畫のことを書た書物を買て、其れを勉強して居るうちには他の事情も分るだらうと云ふ、無據い漸進主義を取つて、丸善へ出掛て買たのが「レイチ」とか云ふ人の横本の水彩畫帖であつた、歸り掛に店の番頭に繪の具の事を聞くと、佛製の餘りよくない物だが有るといふ、其時は丸善は何だか矢鱈エ

ライやうな氣がして嬉しかつた、其の書物と繪具箱を持て其翌日直に歸國した、其れから一ヶ月も其の本を研究して、そうして粗末な畫學紙を買てお手本通り臨本摸寫もやれば實物寫生もはじめた、根氣よく四月の間、隙があれば夜晝なく續けたがドーしても物にはならなかつた、殊に色の調子において重に失敗するのである、自分ながら無器用なのに愛相が盡きて、果ては僕は先天から畫を描く資格を持て生れなかつたと迄思詰めたのである、併し未練は殘てゐる、一昨々年出京した時三宅先生の東京近郊を畫た最初の『スケッチ』と云ふ物が初めて手に入つて、其を見ると今迄困難を感じた點について發明した處が出來たやうに思つて、歸りには小山驛で汽車を下りて其れから徒歩で足柄山中竹の下、金時山御殿場の富士溪上の水車、など凡十枚ばかり二日掛りて寫生して沼津まで出た事があつた、此時の寫生は前に懲りて鉛筆畫の上に薄く水彩を塗た位のもので、僕が常に理想する水彩畫といふ物には全然ならぬので、矢張り不愉快で日を送て居た、すると一昨年春の頃大下先生の水彩畫の榮に接するの榮を得て、

多年模稜の間に在つた事柄が明瞭になつて、どうやら杖なしでも歩けそうになつたので、其れから新に紙も買へば繪具も買ひ、其他の材料も買調へ、改めて水彩畫の領地へ踏出すことになつた、即此時を以て僕が水彩畫をはじめた紀元とするのである、

○ 後藤孤肆

何鳥とよは定めぬ山居の日美妙の音の窓に  
落ち來る

西の國大寺九月の施餓鬼會や亡者に似たる乞  
食等群す

群羊の如くもあるや大海に眞ひる現しぬ怪形  
の雲の

去にし世の西日の中のみ佛を強い見しか今吾  
目眩する  
潮鳴るや海うろくずの軍勢が今しどよめくか  
ちどきと見る